

課題に正面から向き合い、社会的責任の果たす使命

安倍内閣は施政方針に「女性が輝く社会の実現」を掲げている。大方の受け止めは、日本の成長戦略また超高齢社会・人口減少社会への対応である。だが安倍総理の国連演説や海外出張先での様々な女性達との会合、世界の女性リーダーを招いた「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム」等からは、地球規模の女性活躍社会を思い描いている様に思われる。世界を見渡せば、いま命懸けで闘っている中東やアフリカの女性にも心強いメッセージになる事だろう。日本での女性活躍社会が世界をリードする動きになる事を期待する。

一方、女性の活躍を掲げた我が国の現状は、OECD加盟国と比べても女性の労働参加率は低い。男女の賃金格差も依然として大きい。世界的に見れば立ち遅れ、取り組む課題が山積しているのが現実である。注目したいのは、この政策が妊娠や出産、育児休業等を理由と

するマタハラ防止等、女性勤労者の家事と仕事の両立を強くイメージしている点だ。私立大学関係者、特に本学のような女子大学にとって、安倍内閣による女性活躍社会の促進は大学改革の好機である。カリキュラムマネジメントの観点からは、女性の社会的・職業的自立を促す専門教育と教養教育の充実、そして両者の相互作用が働く教育課程の構築が必要である。授業改革の方向性は、アクティブラーニングの手法による社会人基礎力の育成だろう。学生の「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」が身に付く授業の創造が必要となる。「創造」とするのは、授業改革はヒマがあればするというベルの話ではないからだ。学修させたい内容と到達目標、教材の選択・開発を含めた教養の適正化である。授業を構成する要素は数多い。その一つ一つを洗練し、組織し、学生

の学修へと結び付ける真面目な課題である。

学生は授業で、情報活用能力、人間関係形成能力そして課題対応能力を身に付ける。大学教員は、課題を指摘し理念を掲げるのは得意でも、自身の教育方法の改善は苦手とする。また教育内容に比べて教育方法を軽視する傾向にある。いま、このブレイクスルーが求められている。

大学教員にいま一つ求められるのが、女性活躍社会を創造する為の、学外における社会貢献だ。政府やそれに代わる誰かが女性活躍社会を創造し、自分はそれに乗っかって生きるのはなく、女性活躍社会の創造の為に自分に出るかの発想に立つべきである。新しい社会を創造する為の大学人としての自立心と主体性が問われている。かつて男性中心だった政治、金融、医療等の分野で女性が多く働いている。これは先人の努力の賜であるが、女性が働きにくい環境、活躍しにくい環境は厳然としてある。大学関係者を含め、すべての社会人にこれを改革する責務がある。本学の歴史は昭和十五年神戸新装女学院の創立に始まる。日中戦争で夫を亡くした女性

の自立という国家的課題に洋裁教育の分野で貢献した。戦後は、民主的で文化的な国家の建設と世界平和と人類の福祉に貢献する建学の精神の下、昭和二十五年に神戸女子短期大学の精神の下、昭和二十五年に神戸女子短期大学を設立した。現在は総合生活学科、食物栄養学科、幼児教育学科の三学科からなる神戸女子短期大学と四学部からなる神戸女子大学を擁している。戦中戦後と一貫して女子教育の普遍性を存立基盤とし、女性の自立・活躍、社会貢献を中核的理念に据えて歩んでいる。女性活躍社会の実現には女性の特性を活かす事も大事である。日本の戦後教育は男女同権の意味をミスリードし、男女の特性に違いがなくの如く教えてきた。最新の脳科学研究は、女性は男性と異なる特性を持つ事を明らかにしている。出産後、母親の脳の一部が活性化し、子育ての能力が高まるそうだ。泣き声だけで他人の子と我が子を聞き分ける能力もその一つだ。一方、母親は産後うつや子育ての孤独感を感じ易い。子育ての課題を介護職ゼロに正面から向き合い、学内外で社会的責任を果たすのが大学人の使命である。